

京都 教育センター通信

【発行】京都教育センター事務局
〒606-8397

京都市左京区聖護院川原町4
旧教育会館内

TEL & FAX 075-752-1081

ホームページ <http://www.kyoto-kyoiku.com/>

メール: kyoto-kyoiku@center.email.ne.jp

戦後八十年目の沖縄から学校での「平和教育」実践をのぞむ！

「戦後八十年」という節目である今年の六月二三日、『沖縄慰霊の日』は沖縄で迎えたい」という強い思いが私にはありました。

私が沖縄の自然と歴史に魅了されたのは、三五年前の一九九〇年八月でした。一週間の行程で社会科の授業づくりサークル「さだの会」の仲間と訪れたところからの始まりです。前半の三日間は、石垣島・竹富島の海の碧さや熱帯魚たち水牛との身近な出会い、西表島のジャングルや滝など、初めて見る亜熱帯の景色にテレビでは感じられないものが突き刺さってきました。後半は沖縄本島でまず戦跡や資料館巡りをしました。アブチラガマ（糸数壕）は当時まだ「整備」されおらず、四五年前の状態を残す場でした。その後「ひめゆり平和祈念館での聞き取り」「恩納村・基地闘争小屋での聞き取り」「嘉手納基地『安保の見える丘』での聞き取り」「サトウキビ農家からの聞き取り」などを経験したことが、人とモノから沖縄の戦争の歴史と平和について学び始める出発点になったのです。

その後、二〇〇二年夏に綴喜教組の仲間と同じように本島と南西諸島に行きました。前年の二〇〇一年夏に「韓国平和の旅」を企画して大きなインパクトを受けていたみなさんが、「今年はどこに連れて行ってくれるの？」という声に押されて企画したものでした。それをきっかけに、沖縄の海にはまる人、パイナップル農家と交流する人（現在まで綴喜教組ではビーチバレーを職場に届けています）、退職して石垣島に住まう人、毎年一人でも沖縄南西諸島制覇の旅に向かう人などを生んでいます。

今年は六月二二日の早朝に那覇空港に到着。まずは四度目の「ひめゆり平和祈念資料館」訪問。日本の方、外国の方、年配の方、学生の皆さんなど、実に多くの方が献花をされたり手を合わされたり、写真や文書資

葉狩 宅也 京都教育センター運営委員



料に向き合っておられる姿は、連帯と励ましを感じるものでした。続いてまだ訪れていなかった本島南端の荒崎海岸へ。こはひめゆり学徒隊散華の跡と呼ばれている海岸ですが、多くの島民を巻き込んだ沖縄戦の最終局面に、南へ南へと逃げ惑う住民たちがアメリカ軍の攻撃に追い詰められて命を落とした海岸です。その中にひめゆり学徒隊の女生徒たちもいました。ここを訪れる人はわずかとはいませんが、その時の事実や住民たちの思いは、語り継ぎ学び合い、二度と再びそうした事態を引き起こさないように認識を育てる仕事教育には必要だと考えます。自民党の国会議員の「問題発言」が大きなニュースになりましたが、事実を歪曲したり「歴史修正主義」的発言で政治的な利用をしたりすることに、沖縄県議会が行ったような大きな批判を重ねるとともに、改めて沖縄だけでなく京都で、全国でいい平和教育を重ねる必要があります。

定年退職まで小学校教師として平和教育を意識的に取り組んできた私は、戦後五〇年目に担任した六年生の子たちと進めた沖縄学習「平和な島返して」、六〇年目三年生との「戦争があったころの昔調べ」、七〇年目の六年生との運動会表現演技「二〇一五平和と輪・そして未来へ」などの節目は必ず、毎年のように「おじいちゃん、おばあちゃんが子どものころ『戦争』があった」という聞き取り調査からの報告・話し合いや視覚教材などの実践を重ねていました。そうした経験を今の現場教師と共有して、可能なところから「平和教育」実践を進めてほしいという思いを強くした沖縄の旅でした。

京都教育センター第55回研究集会・第74次京都教育研究集会 トーク①

子どもの“からだと心”の声をきき、「育ち」と「学び」を考える！

山内 さやか（小学校教員）、西田 陽子（高等学校教員）

子どもの力を信じて

報告1 山内さやかさん（小学校教員）

私は小学校の教員です。わが子が三人いて、小四の長女、小一の次女、年少の長男。野井先生のお話を聞かせていただいて、一母親として教師としてワクワク・ドキドキさせてもらって、話したい気持ちにいっぱいになっています。

もうすぐ十歳になる娘ですが、その子が生まれて初めて親になったときに、大人の都合で言われたことをそのまま受け入れて、何も考えないで行動するような子ではなくて、自分の頭で考えることができる子になってほしいと思いました。

子どもが興味を持つことや、夢中であることを世間体や周りの目を気にしてやめさせることは絶対にしないとい心決めて過ごしていました。でも実際は、「周りの親子は全然そんなことしてへんけど、大丈夫かな」とか、嫉妬の狭間で自分の心とのたたかいでした。

公園で私が一番困ったのが水道です。水道を見た瞬間に寄っていき、そこから離れない。一時間、二時間、平気で水遊びをすることがあって、すごく楽しそう、周りのお母さんたちからは「ビショビショ、風邪をひくからやめたら……」とか、白い目で見られながら遊ばせていました。子どもにとっては形が変わったり、冷たかったりする感覚などがすごく魅力的だったのだらうなと思って。今、そのときの姿を思い返すと「全身で地球を感じています！」みたいな様子でした。雨上がりのどろんこ遊びもすごく楽しそうに遊びましたが、他の親子連れは水溜

りを見つけても「汚れるし」、「入ったら濡れちゃうから」などと言って、さつとよけて行かれます。私も自分も子どものときに好きだったこともあり、他の親子がいないときを見計らって泥遊びをさせたりしました。

そんな長女がコロナ禍の二年目に小学校に入学します。みんなマスクしているし、お友だちの顔がわからないし、親も学校に入っていけない。初日は一人、登校班で行ったんですが、次の日から一年半にわたる母子登校がスタートしました。

なんとか送り出そうとしますが、玄関から出ない日や大声で泣き叫んで全然動かない日もあり、泣く子の手を引いて、私は一緒に登校班で学校に行きました。

二年生は相模先生が担任でした。コロナ禍で教室に入るのもためらってはいいましたが、相模先生に「よう来たなあ」と迎え入れてもらって、私まで「どうぞ、どうぞ」と受け入れていただきました。「お母さんも」と椅子を出していただいて、私もそこに一緒に座って、「気がすむまでいてあげてね」と、そういう安心感の中で過ごさせてもらいました。

学級には長女と保育園から一緒に元気な男の子がいて、保育園のときから先生たちは手を焼いておられました。学校の話を全然しなかった長女が、「〇〇君、スシローでごはん、食べたんやって」「スシローのハンカチをもっていたよ」とその子の話をよくするようにになりました。なんでそんなことを知っているのと聞くと、その子と先生がみんな

の前で話をしていたと言うのです。二学期の始業式、いつものように教室へ入ると、保育園のときには釣りがった目をしていたその男の子が、猫みたいに相模先生の首元にまとわりついて、「会いたかった！」みたいな感じでいる姿が衝撃的でした。

コロナ禍の下で、初めて電車に乗って、初めて切符を買って社会見学に行くという日。「行きたくない」と言って泣いて柱にしがみつく長女を連れてなんとか学校まで行きました。門に迎えがなくて、どうしよう……と思っていた時、先生の代わりに子どもたちが入れ替わり、立ち替わり来てくれました。「同じ班やし、何が心配なん？」とか、遠くの方から男の子が「俺だつてホンマは行きたくないかったで」と声をかけてくれたりして、長女が「電車やし、ホームに帽子が飛んでいく心配」と言っても、「私、班長やし、順番かえてはさんであげる」といろんな子が声をかけてくれて、そのうちにギューと私の手を握っていた長女の手がフツと離れ、やわらかくなる瞬間があった、今やと思つて、必死で「保育園の送りもあるから」と離れました。

子どもたちの力を信じておられる先生と、わが子が友だちの力で一歩踏み出し行けるということとほすごいと思いました。仲間の力とか、それを引き出す学級の力に胸いっぱいになりました。



□生徒のモヤモヤを言語化することを心がけて

報告2 西田陽子さん（高等学校教員）

高校教師です。毎年十人ぐらいの転退学が出ます。卒業する頃には、二百四十人が二百十人ぐらいになります。転退学の理由は、これまで仲良かった子たちとうまくいかなくなって人間関係がしんどい。居場所がない。もともと通信制に行きたかったんだけど、全日制を勧められて受験したら受かったから来たけど、やっぱりイヤだという子たちもいます。夜中にゲームをしすぎて、朝、起きられない。休みすぎて進級できないという子たちもいます。家庭の状況もなかなかしんどくて、児童相談所と常に情報共有が必要な生徒も学年に一、二人はいます。発達に特性のある子たちもたくさん通ってきています。

保健室は大繁盛です。「自分の話を聞いてほしい」と。「しんどい」とは言いますが、別に熱があるからじやなくて、授業に出るのがしんどくて保健室でウダウダしたい子たちが集まっています。

京都はだんだん高校の序列化も進んできています。「いい生徒」集めをしなければならない、定員割れしたら困るということで学校は結構厳しく、茶髪の高校生は京都にはいなくなりましたね。女の子たちがスカートぐるぐる巻きのしたり、下にジャージを履いたり、「塩輪スタイルはダメ、ダメ」とジャージを取り上げたり、色々しています。中には「一枚岩の指導だ。なぜもっと注意しないんだ」と怒鳴る先生もいて、教員同士もしんどいなと思うながら仕事をしている感じでした。

今日のテーマ「からだと心の声を聴く」ことは大事と思うながらやっていますが、本当に「受け止められているのかな」「本音を言ってくれてるのかな」という気持ちになっているところなんです。

サラ（仮名）さんという女の子の例です。進級できるかどうかの瀬戸際において、「学校がしんどい」と言い、朝、ゆっくり来たり、「早退します」と帰ってしまったり、体育を休み過ぎて心配している子です。一学期の終わり頃、進級するのは難しいかなと思って、「二者面談してみる？」と聞くと「うん、わかった。先生にも話したいことあるし……」と言うので、学校しんどいからやめると言うのかと思いましたが、違いました。その子は「毎日、友だちといっしょで楽しいねんけど、なんか違うねん」と言うのです。友だちは同じクラスに一人、別のクラスに一人と三人組。いつも三人で一緒にいて、あまり周りの子と馴染めない。ほんまに仲良しなんかな？ という疑問を私はもっていました。「ただ楽しければいいと言うんじやなくて、人の役に立ちたいとか……」という話をしました。「なんでその話をしにきたの？」と聞くと、「なんでわからんけど、しゃべっておいた方がいいかなと思ったの」といいました。彼女がそういうこと私にしゃべりに来てくれたことを嬉しく思いました。

十一月の半ばの研修旅行。危惧したのは、グループ行動のときに、クラスのグループから離れて、例の三人で自由行動を好き勝手するんじゃないかと。ところが、最後までクラスのグループにいました。それまでクラスの中で本当に仲のいい女の子がいなかったのですが、帰りの新幹線の中で、みんな『人狼ゲーム』（会話と推理を中心にしたパーティーゲーム）を京都に帰ってくるまで三時間ぐらいつとやっていました。その姿を見て、ちよつと皮むけたかな……と思いました。思春期らしいことを考えて成長しているのだなと、すごく嬉しく思いました。

もう一人、ユズさんという女の子の例です。

彼女は唇の下にピアスをしています。コロナ禍中はマスクして見て分かりませんでした。体育のときにはマスクをとり、口紅を塗ってないかとカチエ

ックされるので、表の飾りは外していましたが、通っているキャッチの方がどうしても痛くて外せなくてつけっぱなしにしていたのが見つかりました。それが外せなかったらうちの学校は続けられない、しんどい話です。ユズさんは春から進路の話をして、何をしても、「何とかなる、何とかなる」と思っている「というのです。彼女がいよいよ転学するというので、母さんと私と彼女と三者面談しました。お母さんは転学に絶対反対で、何がなんでも全日制高校を出てほしい。娘の方は「全日制は合わない。元々人の中にいるのは苦手で通信制と思っていた。こうなったからには自分絶対転学したい」と言います。お母さんは「何とかなる、何とかなる」と言うけど、何ともならへんし！」と怒ります。

私はユズさんを一学期間ずっと見てきて、（この子の言う、何とかなるは、人任せに適当に身を委ねていたら何とかなる）ではないと思っていたので、お母さんに「ユズさんが言う何とかなるというのは、色んなしんどいことあっても、自分なりに頑張つてどうにかする」というのを言ってるんじゃないかと思えますよ。

実際に、これまで学校の中でもいろんなことを自分で何とかしてきた姿を見えています」と話すと、ユズさんがうん、うんと頷いていたのです。私は生徒がうまく言えないことやモヤモヤしていることに上手く言葉を与えて、言語化を手助けすることで、生徒たちの思考とか感情が整理されて形がくつきりして、次に進んでいけるのではないかと思っています。また生徒たちには「学級通信」や「学年だより」に載せて交流するようになっています。高校生もいろいろありますけど、小さい頃にできなかったことを今取り返すために、子どもっぽい行動をしている子がいっぱいいるなと思います。そんな姿も今日のお話を聞いて、しっかりと受け止めたいと思いました。

学習会や集会、研究会などのお知らせ

**京教組・京都教育センター地方教育行政研 合同学習会
兼 教育署名スタート集会**

54年ぶりの給特法「改正」で学校はどうなる？
ー子ども・保護者・教職員の願い実現に
何が必要か？ 一緒に考えましょうー

◆8月30日（土）13:30～16:45

◆京都教育文化センター103号室（京大病院南側）

◆第一部 講演「新給特法を考えるーその問題と展望ー」



講師 高橋哲さん（大阪大学准教授）

専門は教育法学。2025年4月25日に衆議院文部科学委員会にて参考人意見陳述を行う。埼玉大学准教授、コロンビア大学客員研究員などを経て現職。
著書に『聖職と労働のあいだ』（岩波書店、2022年）『現代米国の教員団体と教育労働法制改革』（風間書房、2011年）など。

特別報告「教員定数増のカギとなる『乗ずる数』改善」

山崎洋介さん（大阪大学助教、

ゆとりある教育を求め全国の教育条件を調べる会会長）

◆第二部 質疑応答と討論

◆主催：京都教職員組合・京都教育センター地方教育行政研究会

◆共催：子どもと教育・文化を守る京都府民会議

◆Zoom参加希望などは下記の京都教職員組合までご連絡ください。

TEL：075-752-0011 Mail：info@kyokyoso.jp

第14回 対話で学ぶ教師のための学習会**テーマ：「教師集団をどうつくっていくか」**

◆日時：11月1日（土）13:30～16:30

◆場所：立命館大学朱雀キャンパス 308教室

（京都市中京区西ノ京朱雀町1 京都市バス千本三条朱雀立命館前）

Zoom参加希望の方は山岡までご連絡ください。yamaokamasa@gmail.com

◆主催：京都教育センター対話型学習プロジェクト